
少女探偵

銀咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女探偵

【Nコード】

N3376Z

【作者名】

銀咲

【あらすじ】

この小説は他の名前が同じ名前の小説、人、団体などとは一切関係ありません

中卒の主人公は職探しをしている時、インターネットで探偵の助手の応募があつている事を知った
他に行く当ても無かったので、主人公はそこに行ってみる事にした
そして主人公は、探偵助手として新たな人生を歩んで行く…
というお話です

読んで見て下さい

設定資料

設定資料です

読みたい方は読んで下さい

【坂上 洋】

主人公

性格は地味なぐらい普通

中学の時に色々あって、高校には行けなかった

親はいない

親戚にお世話になっていた

詳しくは二章で

【星野 楓】

ハイテンションJKなりよ

ギャルとは違うウザさを持っているなりよ

私立神山高校に通っているなりよ

高校の中では超有名、校長と理事長に貸しがあるなりよ

クラスの人気者…だが、一部の女子にはあまり良く思われてないなりよ

親は不明なりよ

彼氏はいないなりよ

【神崎 香美】

楓の住むアパートの大家さんなのだ

ナイスBODYなのだ

101号室に住んでいるのだ

読心術、催眠術、マッサージが得意なのだ

中学は剣道で、高校は薙刀で、大学は空手で、九州一位を取ったのだ
大学を卒業しても就職しなかったため、暇潰しに検定を受けていっ
たところ、漢検・数検・英検共に一級を取ったのだ
親は不明だが、時々手紙を送っているのだ
彼氏はいないのだ

【赤星 白哉】

元ホストだが、今はスキーをしに日本を駆け巡っている
泊まるところは、口説いた女のところ、お金がない時は、口説いた
女から貰うというヒモ生活を送っている
親はどこかに住んでいる
大学が東大だったため、友人は日本中にいる

【島内 静也】

「RX map社」社長であり、ブルーランドの経営者の人
スーツがとっても似合う人
人を助けるためには手段を選ばない人
過去に、会社のお金を全て募金しようとした人
今は会社のお財布は持っていない人
父は死んでいるが、母と2人で頑張っている人
故郷は中国だが、0歳9ヶ月のとき日本に来た人

【中道 利沙】

「RX map社」の秘書であり、会社の財布を握っている人である
スーツがとっても似合う人である
ボン、キュツ、ボンである
ヤクザ(20人)を一人で倒した人である
普段は真面目にPCの前で、カチカチしているのである
親は神奈川県で元気にしているのである
一方的に静也が好きである

付き合っているかは不明である

【島内 佐美子】

静也の母親てきな

80を超えているてきな

息子思いの優しいお婆さん…てきな

元歌手だった…てきな

手芸が得意…てきな

まだ杖も車椅子も必要のない元気なお婆さん…てきな

親は不明…てきな

夫は死んでいる…てきな

【怪盗Q】

怪盗4天王の内の一人でござる

正体は不明でござる

親も不明でござる

恋人も不明でござる

故郷も不明でござる

秘密結社「after days」の社員でござる

【秘密結社「after days」】

怪盗達の秘密結社…かもしれない

この怪盗は超一流…かもしれない

アメリカに本社がある…かもしれない

4天王は、イタリア・アメリカ・日本・オーストラリアにいる…か

もしれない

実は、実在していない…かもしれない

【最後に】

感想、

苦情、

アイディア、

挿絵、

人生相談、

誰でもいいから話してストレスを発散したい、

好きなあの人を振り向かせる方法を聞きたいなどありましたら、

ここに送って下さい

できる限り対応して行きたいと思います

ginsakug@gmail.com

始まり

ここは福岡、日本の大都市の一つである。

ビルの多い方では人がせかせかと歩いている

坂上洋はそんな所の中心である福岡市博多区に来ていた

「やっと付いたな…ざっと2時間ぐらいか」

博多駅から出て来た洋は、バッグの中にある一枚の紙を取り出した紙には

助手募集中！！

詳しくは事務所まで

という文字が並んでいた。洋は中卒の浪人なので就職が難しく助手として雇ってくれないか相談しに来たのである

「こっからはどうやって行くか…」

目の前にはバス停とタクシー乗り場があった

タクシー乗り場では、運転士が暇そうに欠伸をしている

バス停には何人かの人バスがくるのを待っている

「徒歩でもいけるかな？」

紙には

博多駅から徒歩1時間！！

と書かれていた

「これは…近い訳ではなさそうだな」

どちらでいくか迷っていると

「ねえ」

後ろから声をかけられた

邪魔になったのかな？と洋は思いながらも、後ろを振り返って見た

「何ですか？」

そこにいたのは制服をきた少女でした

「その紙…もしかしてその助手になるの？」

女の子はいきなりそんなことを聞いて来た

「ん〜一応そのつもりだけど、何で？」

少女の答えは意外なものだった

「探偵とその関係者とはあまりかかわらない方がいいって聞いたから…」

女の子が言うには探偵はいろいろな所に足を突っ込んでいるからいつ危険な目にあってもおかしくは無い…というものだった

「なるほどねえ」

洋も何度かそう思ったことはあったので言いたい事はすぐに解ったしかし

「それでも行くこうと思つよ」

「何故ですか？」

少女が聞いて来たので、洋は答えた

「探偵に憧れていたのさ」

「何故ですか？」

二度も同じ文で質問をされた洋は

「前に一人の探偵に助けられたからだよ」

と答えた

「そうなんですか」

ちよつと驚いたように少女は言いました

「そんな反応をするって事はここにいる探偵は何か問題でもあるの？」

女の子は

「そんな事は無いです。普通の人ですよ…アレですけど」

「アレとは？」

「会ってみたら解りますよ」

それから何度か聞いて見たけれど、少女は教えてくれなかった少女とは別れてバスで行く事にした

バス停から約3分の所にあるアパートの前に洋はついた

「何号室だっけ？」

「何がですか？」

洋がバッグに手を入れようとすると、後ろからいきなり声がかかってきた

振り返ってみると、女の人が立っていた

「あの〜ここに探偵がいるってインターネットで知ったんですけど」「わたしがそうですよ」

と言つて来た

「本当ですか!？」

「嘘です」

女の方はクスクス笑ながら言った

「私はこの大家さんみたいなのです」

「そうなんですか…」

「その探偵は105号室に居ますよ」

大家さん(?)はそう言つてアパートの中に入って行った

なんだつたんだ?

洋は思ったが

まあいいか…

洋は号室を忘れないようにしながらアパートの中に入って行った

「あっ」

105号室にいたのは、駅にいた少女だった

今も何処かの制服を着たままりビングのソファに腰掛けている

「初めまして…はもう遅いよね」

「探偵だつたんだ…」

「そのと〜り!」

少女は胸を張つて言った

「という訳でよろしく!」

少女探偵の名前は星野楓、洋と同じ16歳らしい
彼女の方は洋と違って中卒浪人では無い様だ

「何であんな事言っただの？」

「あんなことって？」

「駅で話した探偵がどうのこうのって奴」

「ああ、あれは普通の意見を言っただよ」

「じゃああの時言っただアレって？」

「未成年っていうこと」

「なるほど」

「そんな事より、いいの？うちの助手になって」

楓は洋に聞いた

「別にいいよ、雇ってくれるなら」

洋はあっさりと言った。

「ゴツいむきむき探偵よりかはマシだよ」

「確かにそうだね！」

楓はそう言っと、いきなり立ち上がった

「よし！いくぞ！！」

「いくつて何処に？」

「大家のとこだよ！！あんたもここに住むんでしょ？」

「そうだったね」

「106号室が空いているはずだからそこに住んでもらうよ」

「大家さんに聞く前に決めても…」

「あの人なら大丈夫！！」

「まあ、あの人なら大丈夫そうだな…」

洋は頭の中でくすくす笑っている大家さんを思い浮かべた

「いいよ」

大家さん（神崎 香美…というらしい）は要件を聞く前からOKを出した

「106だろ？もう片付いてるよ」

「ありがとうございます」

大家さんはずっともいい人だな」と洋は思った

「二人一緒に住んでしまえば？」

「そ、そんな事しませんよ」

「よし、話は終わったから早速部屋に行ってみよう！」

途中から飽きて話を聞いてなかった楓はいきなり洋の襟を掴んで引っ張りながら歩き出した

106号室は大家さんの言った通りに綺麗に何もなかった

あるのはコンロと洗濯機とベットだけだった

「ここが今日から君の根城だよ！！」

楓はこのルールなどを教えてくれた

「ここには大家さんと私以外には2人住んでいるよ」

「その二人は？」

「外室中らしい」

そんな事を話していると

ピンポン ピンポン

チャイムがなった

「誰だろう？」

「大家かもよ」

そしてドアを開けてみると、男の人が立っていた

「始めまして」

とても爽やかな笑顔とともに、挨拶をしてきた

「は、はじめまして…あなたは？」

「俺はこの住人の一人、赤星 白哉です」

「元ホストの人だよ」

いつの間にか隣に来ていた楓が言ってきた

「なるほど」

道理でかっこいい訳だ。美男という言葉がとてもぴったしな人である

「今は違うんですか？」

「遠い昔の話だよ……」

「仕事より趣味を優先した人のいい例：の人だよ」

楓によると、昔はホストとしてやっていたけど、今は趣味のスキーをしているらしい

「まあ、俺の自己紹介はこれまでにして大家さんが今夜はバーベキューだったさ」

「本当ですか？」

「お前さんの入室祝いだって言ってたよ」

「おお、久しぶりにバーベキューだ！！」

楓は寝室に行つて、ベッドの上ではしゃぎ回っていた

「じゃあ、また後で」

「あ、あの」

「ん？」

「もう一人の住人は？」

「今日は帰って来ないっばいよ。あんま気にしなくてもいいよ」

そう言うと、白哉は出て行った

「早く準備しておりて来てね」

楓はそう言うと、

カ〜ルビ〜 豚肉〜

などと歌いながら自分の部屋に戻って行った

「これから大変そうだな」

洋は急いで準備を始めた

始まり（後書き）

感想、苦情、アイデア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakuro@gmail.com

事件の始まり

2

洋が引越してから3日が経っていた。

2LDKの部屋の1つは段ボールでいっぱいだった。

しかも全て空であった。

「早くゴミ出しの日よ来い…」

とか洋がいろいろな愚痴を言っている

「hallo～オハヨー!!」

いきなり扉が開いて、楓が入って来た。

「ピンポンぐらい押してよ…」

「そんなもんは私とあんたの間には存在しない事になってるよ」

なんていう理不尽な…などと洋が思っていると、

「そんな事より昼から来客があるから、1時に私の部屋に来てね」

「なんで来るって分かってるの？」

「メールで来るって連絡が来たんだよ」

「なるほど」

「じゃあ1時に来てね」

そう言うと、楓はすぐさま出て行った。

久々～の～仕事～だ～

廊下から変な曲が聞こえて来る…

洋はそう思いながら、開いたドアを閉めに行った。

部屋に戻る時にふと目に入った時計をみて、ため息を吐いた

「朝から騒がしいな…」

短針が7を指していた。

「おお～マメだね～」

1時になって楓の部屋に行くといきなりそう言われた。

「客は1:30に来るってさ」

「なんで30分も早く来させたの？」

「今回の依頼のたまかな内容を説明しようと思ってね」

そこから楓が言った以来の内容をまとめてみると、

ブルーランド当てに犯行状が送られて来たので、どうにかして欲しい。

というものだった。

ピンポーン

「ほら、でたまえ」

何故か楓は探偵っぽく言うので洋は突っ込みたくなかったけれど、客の方が大事なので、黙って従う事にした。

「どちら様ですか？」

と言ってドアを開けると、

「ブルーランドの経営社、取締役社長の島内 静也です」

「同会社の社長秘書、並びに副社長をやっている中道 利沙です」

男の人と女の人が立っていた。

「はるばるご苦労様です。お入りください」

と言って洋は部屋の中に入れた。

洋たちの自己紹介も済んで、早速本題に入った。

「こんな物が届いたんです。」

静也の取り出した紙には、こう書かれていた。

『6月15日、午後3時に、緑の薔薇をいただきに行きます。』

盗Qより』

「緑の薔薇……」

緑の薔薇とは、遺伝子組み換えによって出来た薔薇である。

「という事なので、この人攫いの計画を無効にして下さい」
静也が言った。

「これは警察の方がいいのでは……？」

洋が言うと、

「現場は、皆が楽しいテーマパークです。そんな所に仕事中の警察なんて入れたら、ムードが台無しです」
と利沙が答えた。

「犯行予定現場まで書かいてあるから、後はこっちで計画を立てるよ」

楓がいきなりそんな事を言った。

「本当ですか？」

「ああ、この依頼受けるよ」

「ありがとうございます」

静也はそう言うと、頭を下げた。

「それでは、私たちはこれで」

と言って二人は部屋から出て行った。

「さて、助手よ」

「なんででしょうか、楓探偵」

「これから忙しくなるぞ」

楓は満々の笑みで言いました。

それから3日経った今日は洋は楓から部屋に呼び出された。

明日は犯罪防止のための下見に行く事になっている。

その事についての説明をしている。

「明日は遊園地に下見をしに行く事になった!!」

楓はハイテンションだった。

「下見だって事をー」

洋が釘を打とうとすると、

「明日はどの服を着て行くの?!!」

服を持った楓が遮った

「で、明日はどうするの?」

洋が言うと、

「うん。明日はねー」

楓が言った事をまとめると、
まず最初に運営会社の方に行ってフリーパスをもらい、ブルーランドに向かう。

ブルーランドに入ったら、犯人の犯行予定地である科学技術館に行く。遊園地の中にある科学館なので、科学のアトラクションでいっぱいらしい。

「下見が終わったら？」

洋が聞くと、

「もちろん、フリータイムだよ！！！！」

それからずっと楓はハイテンションだった。

これは明日大変そうだな…

洋は楓のテンションを下げるのを諦めて自分の部屋に帰り、明日の準備をして、すぐに寝た。

洋は午前4時に起きた。

いや、起こされた。不法侵入した楓から。

「なんで入って来れたの…？」

「大家から合鍵を借りたのさ！！」

相変わらずあの大家さんは…

洋がどうにかしよう合鍵も貰うか？と考えていると

「ホラ、ぼーっとしないで早く準備して！」

「いくらなんでも早くない？」

「9時ジャストに着くにはぴったしだよ！！」

「それってテーマパークの方に、だよな？」

「そんな事言っていないで早くしろ！！」

という訳で表に出ると、

「こんな時間にすみません」

静也さんが、車のそばに立っていた。

「なんているんですか？」

「昨日電話で、私が探偵さんに早く来て欲しいと言った、」じゃあ

明日4時に来て下さい』と言われたので…」

「なるほど」

後で叱っておくか…

洋が静也さんと話していると

「早く行かないの？」

暇そくに車の中で寝っ転がっていた楓が言ってきた。

「じゃあ、今日はよろしくお願いします」

「いえいえ、こちらこそ」

そして車は出発した。

事件の始まり（後書き）

感想、苦情、アイデア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakuro@gmail.com

舞台に下見をしに行こう

ブルーランドを経営するのは、「RX map社」である

名前の通り、初めは地図を作っていて、それからカーナビ、スマートフォンアプリの制作などをして一躍有名になった会社である。財力はもの凄く、自分達専用の工場などを全国に建てている。ブルーランドは、経営会社がお金持ちなので、デイズニーランド並みにすごいと言われている。ついでに、建っている場所ももの凄く、孤島である。本州と繋ぐ橋が一本だけある。

「まさかこんな所に来れるとは…」

洋が惚けていると

「これから不景気によってもっと行きにくくなるかもしれませんね」
静也さんが言った

「ところでさ、怪盗Qって何者？」

洋は聞いてみた

怪盗Qとは、今回の依頼の犯行予告を出した者である

「怪盗Qは、盗んだ時に暗号を置いて行って、暗号が解けたら盗んだ物を返す性悪怪盗だよ」

楓が言うには、ヒントすら書かれてない暗号を置いて、警察や探偵をおちよくる、快樂犯だそうだ

「その暗号は、今まで一度しか解読出来なかったそうです」

静也さんは苦虫を噛み潰したような顔で言った

「へ〜」

警察や探偵に喧嘩を売るなんて凄い人だ…

「警察&探偵にとっては強敵だよ」

楓は何とも思っていないような言い方だった

それから、1時間ぐらいでブルーランドに着いた
まだ開いて無いのに、行列ができていた

「職員入口から入りましょう」

静也さんは早速僕らを案内した

「次からはここから入っていいの？」

そこは、普通の鉄製の扉だった

「こつちから入った方が早いので．．．向こうから入りたければ、向こうでもいいですよ」

静也さんは、人がゴミの様に集っている、豪華な正面玄関を指差していった

「いえ、こつちでいいです．．．」

楓は諦めたようだ

「それでは、中に入りましょうか」

ブルーランドはとても広く、気を抜いたら迷子になりそうだった

楓は2回迷子になった

「後で地図を上げましょう」

「お願いします．．．」

洋は一度もアトラクションに乗って無いのにクタクタだった

「何で必要なの？、そこにあるじゃん」

そう言つと、楓はそこにあつた案内板を指差した

地図が貰えるようになった原因の人は、地図の必要性が分かっていなかった

楓は携帯のGPSで居場所が分かったので、洋は、地図をととても大切にしようと思った

「まあ、迷子はよくあるので、気をつけて下さいね」

「こんなにある事なんですか…」

「ま、よくある事さ」

楓は気にした様子は無かった

「ここが問題の緑の薔薇がある施設です」

そこは一言で言つと、博物館だった

「おつきい…ですね…」

「ここは他に何を置いてるの？」

「科学の結晶です」

静也さんが言うには、ここは他には無い科学に関するものが置いてあるらしい

緑の薔薇もその一つである

「こんだけデカイのなら、すごい警備でしょう？」

「そうですね、普通の強盗なら盗むのは不可能でしょうね」

静也さんは、

「これよりすごい設備のところの犯行もあっさりしてしまった怪盗

Qには、あまり意味が無いでしょう」

と続けて言った

施設の中はとても広かった

孤島に建っているだけはある

外見はリゾートホテル並みに大きかった

中身もいろんな意味ですごかった

「ここにくる人っているんですか？」

今は開園直後なので、誰もいなかった

「疲れた人…主に男性がよく来ますね」

静也さんが言うには、子守に疲れる人がよく子供を勝手に遊ばせて

おいて、親はここに来るそうだ

時々寝ている人もいるらしい

「これが緑の薔薇です」

そこには、緑一色の花があった

「花びらでも光合成するんですか？」

「ええ、勿論ですよ」

静也さんは説明したけど、洋は全然理解できなかった

それから、一通り建物内を散策して、お昼になったので何か食べる

事になった

静也さんは仕事があるそうなので、途中で別れた

「昼はナポリタンが食べたい」

という楓の一言で昼食が決まった

ブルーランドには、3大料理店があり、そのうちの1つである「麵類ランド」に行った

「麵類ランド」は三ツ星レストランである。店舗名からは想像も出
来ない事実である

「豪華…」

楓は店に入ると、お店の中央にあったオブジェにみとれていた

「お嬢ちゃん、そこは危ないよ」

右手に雑巾が入ったバケツを持った男性が言ってきた

「すみません」

洋は楓を引つ張って退かした

「今から掃除するの？」

「そつだよ」

そつ言うと、男性は雑巾を絞って左手でオブジェを磨き始めた

「大変ですね」

洋は手際の良さに驚いた

「15年ぐらいやつてればコレぐらい平気だよ」

「15年もやつてるんですか…」

「そんな事より、早く昼食を食べたらどうだい？」

男性はそつ言うと、オブジェの上の方に登っていった

「じゃあ、何か食べるか」

楓を引つ張りながら、洋は何を食べるか考えていた

舞台に下見をしに行こう(後書き)

感想、苦情、アイデア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakuro@gmail.com

男同士のトークタイム

お昼を食べたら、楓のテンションはハンパなく上がった

楓は、目の前にあるアトラクションを片っ端から乗って行った
たとえそれが子供用でも、見るからにR18のものであっても変わらなかつた

そしてそれに洋も当たり前のように付き合わされた

「もういいだろ…」

「まだまだ！！！！後、95個やって無いアトラクションがあるんだから！！」

ブルーランドにはアトラクションが、ジェットコースター10台、観覧車2台、カーレースもどき、川下りもどき、ボートレース（見るだけ）、トリックアート、ローラースケート、映画模擬体験、声優模擬体験、動物ふれあい広場など…約200種類あるらしい（お店も含む）

楓は、ボートレース、3D映画などの見るだけの物とお土産屋、模擬体験などを除いた118個を乗ろうとしていた

「一人で行つてくれ…」

「ダメ！助手は一緒にいないといけないの！！」

結局、全てを乗る事は出来ず、次の機会に延期された
まだ76個もある…

「疲れた…」

洋は、案内所の中で死んでいた

案内所はよく聞く言葉で言うと、迷子センターである
今も、洋の真横で泣いている男の子がいる

しかし、洋はお構いなく燃え尽きていて、子供がいても、叩いても無反応だった

「ほら！！！！元気出して！！！！」

楓は何故か元気だった
若者は元気じゃのう…
洋は力尽きた

「うっ…」

洋が気が付くと、そこは車の中だった

「生きてた…」

神様命を与えてくださってありがとうございます…

「くーー」

隣では、楓が寝ていた

「起きられましたか？」

運転していた静也さんがミラー越しに聞いて来た

「あ…どうもすみません」

「いえいえ…そんな事より、今日は大変だったでしょう？」

「えっ、何ですか？」

「あんな所で寝ていた時点で、そうじゃないとおかしいと思いま
すよ」

「ああ…確かに…そうですね」

あそこは確かに迷子の子供達がうるさかったからな…

「で、何か進展でもあったんですか？」

「??？」

「そこに膝枕で寝かせている探偵さんと…ですよ」

楓は、洋の膝の上で寝ていた

「そ、そんな事無いですよ」

洋がそう言うと、静也さんは笑だした
3分ぐらい笑った後、

「すみません…だけどその状態だと何かあったと思ひまして…」

「いえ…一つだけ分かったことがあります」

「それは？」

「こいつがガキだという事ですよ」

するとまた静也さんは笑だした
「いい事を教えて上げましょう」
笑い疲れた静也さんが言ってきた
「私がかきた時、楓さんは半泣きの状態でしたよ」
「え？何故ですか？」
「『私のせいで、助手が起きない…』と言っていましたね」
「原因が分かったただけでもOKにしておきましょう…」
そんな話をしながら、車はアパートに向かっていた

「それでは、今日はありがとうございました」
「いえいえ、こちらこそ」

静也さんは別れの言葉を言うと、車に乗ろうとしたが、
「ああ、楓さんが乗ったままですね」

楓は車の中で寝ていた

「じゃあ、楓さんはよろしくお願いします」
と言うと、静也さんは洋に楓を押し付けて出て行くとした
「ちょ、ちょっと待って下さい」

洋は静也さんが出て行くことするのを止めた
「何か用でも？」

静也さんは普通に聞いてきた

「手伝ってくれませんか」
洋が頼むと

「カップルの邪魔をすることは出来ませんよ」
と言ってきた

「カップルではありません!!」

「まだ早いから、あまりイキすぎるなよ」

「そんな事しませんよ!」

静也さんは笑ながら帰って行った

「しょうがない…か」

洋は楓をおんぶして階段をのぼり始めた

だけど楓は確かに可愛いし…今しかチャンスはないぜ？一気にヤッ
ちやいなよ

などと言った悪魔洋の囁きが聴こえたけれど、そこまでの気には
ならなかった

楓のいい香りを嗅ぎながら2階にあがり、105号室の前にきた

「…鍵がない…」

いくらなんでも、バックやポケットの中を漁るわけにはいかないの
で、自分の部屋に入れる事にした

「今の季節なら風邪は滅多に引かないだろ」

洋はそう言つと、楓を自分のベッドに寝かせて、リビングにあるソ
ファーに掛布団を掛けて寝ようとした

おいおい、このまま寝ちゃったら、いい事ないかもよ？いいのか？
よくねーだろ！…起きろー！！！！

ダーク洋が言ってきたが、睡魔のやりに串刺しにされて消えていった
そして洋の意識は、闇の中へと落ちていった…

男同士のトークタイム（後書き）

感想、苦情、アイデア、挿絵、人生相談などありましたら、ここに送って下さい

ginsakuro@gmail.com

もう一つの表情

そして、下見から一週間がたった

あれから楓の態度は全然変わってなかった

「静也さん…嘘ついたのか…」

まあ…そうだよな…あいつが泣くなんて…

洋が考えこんでいると、

「よっしゃー！！行くぞー！！」

楓が元気よく入ってきた

「はいはい…」

洋は何もやってないのに疲れた身体を動かして、下の階に向かった

アパートの前には、静也さんがいた

今日は怪盗Qが犯行予告した日である

「それでは行きましょうか」

静也さんは二人を車に乗せると、ブルーランドに向かった

怪盗Qは、午後3時に現れるそうだ

ブルーランドには、夏休みが始まったので、大勢の人が集っていた

「相変わらず凄い人の量だ…」

「人がゴミのようだ！！」

楓は、どこかの漫画に出てきたセリフを言った

「あそこに並びたいのですか？」

「…いいえ」

二人は即答すると、職員入口の方に向かった

3人は、犯行予告のあった博物館の前まで来た
博物館には館長が居た

「「こんにちわ」」

「はい、こんにちは」

館長さんは80歳を超えるお婆さんである

名前は佐美子さん

そして、静也さんのお母さんでもある
なぜ館長をしているのか聞いてみたら

「息子だけでは心配だからですよ」

と言う、とても面倒見のいい優しいお婆さんである

「今日は大変そうね」

「お婆さんにも話を聞く事があるかもしれないから、その時はよろしくね」

「分かっていますよ…だけどねえ…一つ頼んでいいかい？」

「何ですか」

「もし、怪盗Qにあつたら、サインを貰うように言ってくれないかい？」

「分かりました。貰えたら貰っておきます」

「ありがとうね」

そして、洋達は、三階にある、植物展示コーナーに向かって歩いていった

緑の薔薇は、ちゃんとガラスケースの中に収まっていた

「これからが山場ですね」

洋が言うと

「ちがうよ」

楓が返して来た

「怪盗が犯行を行なった場合、姿を表した時にはもう犯行は終わっているんだよ。山場は、怪盗が残っていた暗号を解く事だよ…依頼だって一言も怪盗を捕まえてくれ、なんて言ってなかったしね

く(ゝ)。(ゝ)」

「まあ、別に怪盗は捕まらなくてもいいです…見てると面白いです

から」

洋は聞いてみた

「もし、もしですよ？暗号がわからなくなっ、盗まれていったらどうするのですか？」

「諦めますね」

「諦めるって…」

「薔薇はいくらでも咲きますから…大切なのは、他の人をどれだけ楽しめれるか…ですよ」

「どういう意味ですか？」

「怪盗Qはみんな知っています。そしてニュースなどでみんな活躍を待って居ます。そこで捕まったりしたら、楽しみにしていた人々は、悲しんでしまうでしょう？」

「なるほど」

「薔薇は簡単に咲きます…しかし、人の笑顔は簡単には咲きません。そんな大切なものをわざわざ枯らす必要は無いですよ」

何か深いイ話になってしまった…

それから、犯行時間までは、博物館の前に集っていた記者の相手をする事になった

そして、犯行予告の3分前になった

「緊張するね…」

「ワクワクするよ!!」

「私も、とても楽しみです」

「そー(ブツ)」

洋が話そうとすると、いきなり電気が消えた

「おお!! 凄い!!」

隣では、楓が感動の涙を流していた

「私は、お二人がもつと騒ぐと思っていましたよ」

静也さんは、外にいる警備の人に扉を閉めるように無線機で指令を出していた

「まあ、慣れてますし」

「すごーい！！！」

いい加減うるさいので、楓を黙らさせた

ー（パツ）ー

そして、電気がついた

その間、約3分

「それでは、行ってみましょう」

静也さんに続いて、緑の薔薇のところに向かった

「…これは確かにすごいな…」

そこには、金庫があつた

ガラスケースごと困つてある様だつた

「ガラスケースを動かすと警報が鳴るようになっていたんですけど、無駄だつた様ですね」

「ここまで時間きつちりにやるなんて…」

「流石大怪盗！！余裕だね」

すると、後ろの扉が開き、3人入つて来た

「この二人が、事件発生直後にいた人物です」

「ご苦労さまです、引き続き警備に当たって下さい」

警備の人は、会釈すると出ていった

そして、その二人とは…この館長の佐美子さんと、昼食をとつたときに像を磨きに来た人であつた

「それでは、お二人にお伺いしたい事があるのですが、よろしいでしょうか」

楓がいきなり敬語をしゃべり始めたので、洋と静也さんは驚いていた
楓のもう一つの表情がそこにあつた

それぞれの決意

怪盗Qが盗みを働かせて30分がたっていた

「事情聴取があれだけだったとは…」

楓は2人に、事件発生直後に何処にいたのかだけを聞いた

「あれだけでいいのかよ…」

「捕まえるのが目的じゃないからね」

楓は、金庫の前に置かれた紙を見ていた

紙には

『 2 2 4 3 5 1 2 2 2 5
2 4 3 6 7 1 8 5 9 1 0
』

タイムリミットは三時間

せいぜい頑張りたまえ

怪盗Qより
『

と書かれていた

「解けそう？」

「全く…解けるわけない…」

楓達は、暗号解読に入った

静也さんは、

「坂梨さん、ポケットに入ってるのは何ですか？」

あまり質問されなかつた2人に話を聞いていた

「コレですか？これはポケベルですよ」

「ああ、懐かしいですね」

ポケベルとは、携帯ができる前に通信手段として使われていたものである

それから、年配組の容疑者二人は、思い出話を始めた

それから、一時間が経過した

普段の生活ぶりからすると、考えられないほど楓は集中していたしかし、

「無理だ…わかんない…」

暗号解読は、全然進歩が無かった

「バブルの時はー」

容疑者二人は、まだ昔話をしていた

楓は洋に休憩すると言つと、その二人の方に行った

洋は、一人で暗号にむかっていると、

「どうですか？」

静也さんがやってきた

「全然です…あの2人は何を話しているんですか？」

「自分たちの人生の話だそうですよ、年配の方の人生は面白いですね」

「そうですね…」

「聞いて見てはいかががでしょうか？探偵さんも話に入り込んでいますよ」

「遠慮しておきます…これを解かないといけないので。」

そう言つと、静也さんは笑つた

「そうですね…しかし、このバラは失つてもいいと思いますよ」

「それだけで、人々が笑顔になる…からですか？」

「そうですね。人の笑顔はとても貴重なものですから…たとえ薔薇を失つたとしても、辛い思いをするのはわたしだけですから」

いい人だな…

洋は思つた

「あなたもそこまでしなくても、解けなかつたら、残念…で終わればいいですよ」

静也さんは笑いながらそういつた

「それは出来ませんよ」

洋はキツパリと言いつた

「なぜですか？」

「なぜなら、あなたも僕からみれば、笑って欲しい人々の内の一人ですから」

静也さんは一時キョトンとしていたが、また笑だした

「別にいいですよ、辛いつて言うのは、利沙に怒られるって言うだけですから……」

「だけど、僕は守ってみせますよ……その笑顔を」

洋がそう言った瞬間、楓が後ろから飛びついてきた

「ふっふっふ……まさか私のことを忘れてないよね？わ・す・れ・て・た？」

「いや……ちゃんと憶えてたよ」

「ほんと？？？？」

「本当だつて！！そんな事より、この暗号を解かなくちゃ！！」

横を見ると、大人三人は温かい目で見つめてきていた

「ふっ、その必要はない……謎はすべて解けた！！」

楓は言い放った

「いや……ちよつと待って、怪盗Qの素顔は分かってない……」

楓は後ろを向いて何かを呟いていた

そして、

「謎はほんの一部解けた！！」

パチパチパチ……

拍手は孫の成長を喜んでいる様な感じの容疑者二人から送られた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3376z/>

少女探偵

2011年12月17日09時54分発行